

基における大乘二種姓解釈の特徴について

多田修

序

大乘二種姓は本性住種姓・習所成種姓からなり、玄奘訳『瑜伽師地論』『仏地經論』『成唯識論』に説かれる。基『成唯識論述記』(以下『述記』)は本性住種姓・習所成種姓を解釈する中で、習所成種姓とは聞熏習によつて増長した本有無漏種子であり、習所成種姓の名が用いられるのは初地に入るまでであるという。これは、習所成種姓が見道以後に生ずる新熏無漏種子と異なることを意味する。

しかし、基以前の見解において、本性住種姓・習所成種姓とともに初地以前に限定する文言は確認できない。そこで本稿では、『成唯識論』などにおける大乘二種姓に関する規定と、それに関する解釈の変遷を追うこととする。

一 基以前の本性住種姓・習所成種姓解釈

本性住種姓・習所成種姓の語は玄奘訳『瑜伽師地論』『仏

地經論』『成唯識論』に見られる。

『瑜伽師地論』卷三五

云何種姓。謂略有二種。一本性住種姓、二習所成種姓。本性住種姓者、謂諸菩薩六處殊勝有如是相、從無始世展轉傳來法爾所得。是名本性住種姓。習所成種姓者、謂先申習善根所得。是名習所成種姓。

ここでは本性住種姓・習所成種姓の本有・新熏を論じない。

『仏地經論』卷三

本有無始法爾、不從熏生、名本性住種性。發心已後外緣熏發漸漸增長、名習所成種性。初地已上隨其所應乃得現起。

發心以後に「熏發」して「增長」したものが習所成種姓であり、それは初地以上に現起すると説く。これは、習所成種姓が地前から存在することを示唆する。

『成唯識論』卷九

如是所成唯識相・性、誰於幾位如何悟入。謂具大乘二種姓者、略於五位、漸次悟入。何謂大乘二種種姓。一本性住種姓。

謂無始來依_三附本識_一法爾所_レ得無漏法因。二習所成種姓。謂聞_二法界等流法_一已、聞所成等熏習所_レ成。要具_二大乘此二種姓_一、方能漸次悟_二入唯識_一。

ここに「大乘の二種姓を具せる者、略して五位に於いて漸次に悟入す」と説かれ、資糧位の時点で本性住種姓と習所成種姓を有していると解釈できる。この場合、習所成種姓は新熏種子と同一ではない。

ただし『成唯識論』が本有種子を「本性住種」、熏習によつて生ずる種子を「習所成種」と呼ぶ例があり、習所成種姓が見道以後に生じる新熏無漏種子であると解釈し得る。

『成唯識論』 卷二

有義種子各有_二二類_一。一者本有。謂無始來異熟識中法爾而有生_二蘊_一。処・界_一功能差別。世尊依_レ此説_下諸有情無始時來有_二三種_一種界、如_二惡又聚_一法爾而有_上。余所_レ引証広説如_レ初。此即名為_二本性住種_一。二者始起。謂無始來數現行熏習而有。世尊依_レ此説_下有情心染・淨諸法所_二熏習_一故、無量種子之所_中積集_上。諸論亦説、染・淨種子由_二染・淨法熏習_一故生。此即名為_二習所成種_一。

また『瑜伽論記』によれば、護法は「聞熏習があつても本有種子であれば本性住種姓に属す。地前に無漏の習所成種姓の体はなく、初地に至つて無漏の習所成種姓が生ずる。有漏については地前から本性住種姓・習所成種姓がともにある」と説いたとされ、景(慧景)⁵は護法説に準じて解釈するが、基の解釈はこれと異なるという。

基における大乘二種姓解釈の特徴について(多田)

『瑜伽論記』 卷八下

若依_二護法_一、地前雖_下彼有漏聞熏資_上導本種_一增多如_中薑芽等体_上、是本有種類、総属_二本姓住種姓_一。是則地前無_レ有_二無漏習種姓体_一。但從_二姓種姓_一生_二於初地初念無分別智_一。此智起已即熏_二成種_一一方は無漏習種姓体。若論_二有漏習種_一、地前即有_二二得名_一。旧名_二性種姓_一、今名_二本性住種姓_一。旧名_二習種姓_一、今名_二習所成種姓_一。此中通名_二二種種姓_一者、從_レ數就_レ義為_レ名。別名_二性・習_一者、性種当体得_レ名。習種姓從_二方便_一得_レ名。三約_二位前後_一。景云。「…(中略)：若依_二護法_一、云始從_二十信_一已前及在_二地前四十心位_一、是姓種。在_二地前_一時雖_下為_二有漏聞熏_一資_上發本種_一功能增長_上、猶是本有種類。是故判_下入_二姓種_一所_レ収。以_レ經地前未_レ有_下現_二行無漏_一別熏_中成種_上。故無_二無漏習種姓_一。故種姓居_レ前但有_二有漏聞熏種子_一名_二習種姓_一。入_レ地已去無漏現行熏_二成種子_一即有_二無漏習種姓_一。義在_二於後_一。基解別_レ之。入_レ文当_レ述_上。

二 基における大乘二種姓の規定

上記の通り、『成唯識論』においては習所成種姓と新熏無漏種子を同・異いずれにも解釈する余地がある。『瑜伽論記』所引の護法の説では、初地に至つて無漏の習所成種姓の体が生ずると説くが、一方で習所成種姓の名が地前にも用いられると述べる。しかし基は、習所成種姓と新熏無漏種子が異なるという見解を明確にする。まず、種子の「増長」と「新熏」の異同について次のように述べる。

『述記』卷二末

諸法種子有漏・無漏各有二類。本有・新熏。理無_レ失故。不_レ違_レ經故。入_二見道_一已別熏_二生種_一、無漏行故。地前但令_二旧種增長_一。有漏現行勢力弱故。不_レ別能令_二無漏種起_一。此中但言_二由_一聞熏習_一令_二本有種漸増盛_一故。

見道(通達位)に入つて以後、無漏が現行されるため新熏種子が熏習されるが、見道に入る以前(地前)は本有無漏種子が聞熏習によつて増長されるとする。

そして習所成種姓について次のように解釈する。

『述記』卷九末

論。二習所成種姓至熏習所成。述曰。此聞_二正法_一以去令_二無漏旧種增長_一名_二習種姓_一。…(中略)…「聞所成等」、即是_二三惠所成_一。非_二必新生方名為_レ「成」。令_二種增長_一亦名_レ「成」故。若由_二三惠_一無漏種増、何故乃言_二聞所成等_一。意顯_二能成非_一唯有_レ惠。惠俱品法亦能成故。能成既爾、所成亦然。故論說言_二「聞所成等」_一。…(中略)…：此是未_レ種_二解脱分善_一名_二本種姓_一。未_レ聞_二無漏法_一令_二無漏種増_一。種_二解脱分善根_一以去名_二習種姓_一。聞_二無漏教_一為_レ緣令_二無漏種増_一故。…(中略)…勝解行地發心已去、未_レ入_二初地_一名_二習所成_一故。

習所成種姓とは増長した本有無漏種子であるという。そして「成」とは必ずしも新たな種子を生ずることではなく、種子が増長することも「成」であると述べる。その上で、「習所成種姓」の名が用いられる範囲を發心して以後、初地に入る

まで(すなわち資糧位・加行位)という。これは、習所成種姓とは増長された本有無漏種子であつて、通達位(見道)以後に生ずる新熏無漏種子と異なることを意味する。⁽⁹⁾

三 基における大乘二種姓解釈の背景

先述の通り、基は習所成種姓と新熏無漏種子を明確に區別し、習所成種姓の名が用いられるのは初地に入るまでとする。ただし、『瑜伽師地論』『仏地經論』『成唯識論』そして『瑜伽論記』所引の護法説は、これを直接示すものではない。『述記』における解釈は、『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』の影響を受けたものと考えられる。

『述記』は本性住種姓・習所成種姓を論じるに際して、『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』の説を取り上げ、次のように述べる。

『述記』卷九末

然仁王經及瓔珞等經所_レ說所同者如_二別抄會_一。…(10)…詳細を『別抄』にゆづっているが、本性住種姓・習所成種姓を解釈するに際して、『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』との会通を施した旨を述べている。⁽¹¹⁾その背景には、「本性住

種姓」「習所成種姓」が玄奘以前に「性種性」「習種性」と訳されていたことが当時知られており、⁽¹²⁾そして「性種性」「習種性」の語が『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』にも

見られることがある。

『仁王般若波羅蜜經』卷上

習種銅輪二天下 銀輪三天性種性 道種堅德轉輪王
 七宝金光四天下 伏忍聖胎三十人 十信・十止・十堅心
 三世諸仏於中行 無不下由此伏忍一生上 一切菩薩行本原
 是故發心・信心難 若得信心・必不退 進入無生初地道
 教化衆生・覺中行 是名菩薩初發心

『仁王般若波羅蜜經』卷下

善男子。其法師者是習種性菩薩。若在家婆差・憂婆差、若出家比丘・比丘尼、修十善・自觀己身地・水・火・風・空・識分不淨。……(中略)……復次道種性住堅忍中。觀一切法無生・無住・無滅。……(中略)……復以三阿僧祇劫、修八萬億波羅蜜、當得平等聖人地。故、住阿毘跋致正位上。

『菩薩瓔珞本業經』卷上

四十二賢聖名門決了義。十方三世一切諸仏皆共同説「一而無二」。
 仏子。所謂留伽度秦言免、留諦迦度秦言治、留羅伽秦言修、留摩阿秦言生、安婆沙秦言方便、毘跋致秦言正、阿毘跋致秦言不退、必叉伽秦言童、必阿羅秦言法、流止迦秦言灌、度阿秦言飲、度安爾秦言饒、度只羅秦言無、度利他秦言離、度生婆諦秦言善、度沙秦言無、度阿訶秦言重、度仏何秦言善、度又一婆秦言真、羅諦流沙秦言救護、羅曇沙秦言不、必白伽秦言等、法必他秦言至、仏度陀秦言無、羅叉必秦言隨、師羅叉伽秦言隨、波訶諦秦言如、波羅提弗陀秦言無、達摩迦秦言法、鳩摩羅伽秦言逆、須阿伽秦言道、須那迦秦言流、須陀洹秦言明、斯陀含秦言勝、阿那含秦言現、阿羅漢秦言有

基における大乘二種姓解釈の特徴について(多田)

阿尼羅漢秦言變化、阿那訶秦言慧光、阿訶羅弗秦言明行、摩訶一和沙秦言無相、婆伽婆伽秦言妙覺、……(中略)……仏子。性者、所謂習種性・性種性・道種性・聖種性・等覺性・妙覺性。……(中略)……仏子。汝先言名字者、所謂銅宝瓔珞。菩薩字者、所謂習性種中有二十人。其名一發心住菩薩・治地菩薩・修行菩薩・生貴菩薩・方便具足菩薩・正心菩薩・不退菩薩・童真菩薩・法王子菩薩・灌頂菩薩。仏子。銀宝瓔珞。菩薩字者、性種性中有二十人。其名一歡喜菩薩・饒益菩薩・無瞋恨菩薩・無尽菩薩・離痴乱菩薩・善現菩薩・無著菩薩・尊重菩薩・善法菩薩・真實菩薩。

結

両經とも、習種性の後に性種性の階位があり、いずれも地前であると説く。基以前や基の同時代には習種性・性種性について、これにもとづく解釈が普及していた。そのため、基も本性住種姓・習所成種姓を地前に位置づけたと考えられる。

基は「習所成種姓」の名を用いる範囲を見道以前に限定する。このような解釈は、基以前には確認できない。基の解釈は、『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』の影響を受けたものと考えられる。

さて、大乘二種姓について、玄奘の解釈を明示するものは確認できない。しかし以下の理由から、玄奘には習所成種姓を見道以前に限定する意図はなかったと推定できる。

・玄奘訳の論書の文言は、習所成種姓を見道以前に限定す

基における大乘二種姓解釈の特徴について（多田）

るものではない。

・当時、護法説については玄奘が情報源だったはずであり、玄奘が「護法説」として伝えた内容と玄奘自身の見解が食い違ふとは考えにくい。

・基に先行する慧景の教学において、護法説が踏襲されている。

『述記』は玄奘の講義に忠実と評される⁽¹⁸⁾。しかし、『述記』は玄奘の講義録やその補足にとどまらず、基独自の解釈が發揮されている可能性を指摘できる。

- 1 大正三〇・四七八下。以下、引文には返り点を付して筆者の読みを示す。また必要に応じて筆者の責任で傍点を付す。
- 2 大正二六・三〇四中。
- 3 大正三一・四八中、新導本・卷九・四頁。
- 4 大正三一・八中下、新導本・卷二・一八頁。
- 5 『瑜伽論記』に見られる「景」の説は、基の教学の先駆的役割を果たしたと評される（常磐大定『仏性の研究』丙午出版社、昭和五年、四九九・五〇一・五〇九頁）。宇井伯寿『印度哲学研究』第六（甲子社書房、昭和五年）七八頁は、『瑜伽論記』の「景」を慧景と推定し、この説が広く採用されている。慧景は玄奘の訳場で証義を務めた人物であり、基『瑜伽師地論略纂』が慧景の説をたびたび引用することが確認されている（江田俊雄「新羅の遁倫と「倫記」所引の唐代諸家」『宗教研究』新一一—三、昭和九年）。
- 6 大正四二・四八六下—四八七上。
- 7 大正四三・三〇九上—中。
- 8 大正四三・五五六上—中。
- 9 基がこのように解釈していたことは、『瑜伽師地論略纂』巻一〇（大正四三・一一九中）からも確認できる。
- 10 大正四三・五五六中。
- 11 ただし現行の『成唯識論別抄』（新纂大日本統藏經四八所収、巻一・巻五・巻九・巻一〇のみ現存）には該当の文が見あたらない。なお、吉津宜英「太賢の『成唯識論学記』をめぐって」（『印度学仏教学研究』四一一—、平成四年）は、現行の『成唯識論別抄』を基ではなく円測の著述であろうと推測する。
- 12 法藏は『華嚴五教章』巻二（大正四五・四八五下—四八六上）において、『瑜伽師地論』所説の本性住種姓・習所成種姓と『仁王般若波羅蜜經』『菩薩瓔珞本業經』所説の習種性・性種性の会通を図っている。
- 13 『瑜伽師地論』卷三五（大正三〇・四七八下）、『菩薩地持經』巻一（大正三〇・八八八中）、『瑜伽論記』巻八下（大正四二・四八七上）。
- 14 大正八・八二七中。
- 15 大正八・八三一上—中。
- 16 大正二四・一〇一—中—一〇二下。
- 17 智顛『妙法蓮華經玄義』卷四下（大正三三・七三二上）、吉藏『維摩經義疏』卷五（大正三八・九六九下）、『成唯識論了義灯』巻七本（大正四三・七九二中）所引の円測説など。
- 18 富貴原章信「成唯識論述記解題」（『国訳一切経和漢撰述部論疏部一六』、大東出版社、昭和四九年初版、昭和五六年改訂）、大藏経学術用語研究会編『仏典入門事典』（永田文昌堂、平成一三年）二七八頁など。

〈キーワード〉

大乘二種姓、新熏無漏種子、習所成種姓、護法、
玄奘、基

(浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員)

新刊紹介

藤田 宏達 校訂

『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』

B五版・二五四頁・本体価格八、〇〇〇円
法蔵館・二〇一一年五月

基における大乘二種姓解釈の特徴について(多田)